

対抗できる演説をする首相は？

5月27日の夕刻、オバマ米大統領は広島市の平和記念公園で17分間にわたりスピーチを行った。私は本紙などでコメントを求められていたので、メモを手にもスピーチに聴き入った。

最初の節に触れるや、この大統領は詩人のような感性で世界の人々に訴えていることが分かった。やがて哲学者のごとく、宗教者のごとく、そして随所に国際社会をリードする政治家の息吹があった。改めてその全文を確認すると、主語は「人類」であったり、「現代を生きる私たち」であったりすることが分かる。

そうかオバマ大統領は、このメッセージを歴史に刻むために広島を訪れたのか、との感も受けた。このメッセージは歴史上に強い刻印をおしている。あなたは核大国の最高指導者では、と言いたくなるのを抑えつける迫力がある。

アメリカの指導者はこのような刻印をしばしば歴史に託する。太平洋戦争の開戦直前に、ルーズベルト大統領が昭和天皇に親書を送り、太平洋の平和を願うと、戦争回避を呼びかけたのはその例である。

このスピーチに続いて、安倍晋三首相も所感を述べたが、こちらは主語は「私」であり、その内容も国際社会に訴える点では弱い。むしろスピーチライターとの差もあることは容易に分かる。

私は、二人の演説を聴き終わった後に、ある想像を試みた。もしここに立つ日本側の指導者が、オバマ大統領のスピーチを聴きながら、自分の用意した原稿とは別に、たとえば「人類は」といった次元で話さなければ、スピーチ合戦で負けると覚悟したらどうしたであろうか。原稿なしで被爆国の悲しみと怒りを国際社会に伝え、そして核廃絶を訴えうる指導者は誰だろうか、と考えたのである。

太平洋戦争後に首相の座に就いたのは、東久邇宮稔彦王から安倍首相まで33人である。オバマ大統領に対抗して、詩人や哲学者、宗教家、政治家などあらゆる能力を駆使して即興で所感を述べられるのは、私の見るところ、吉田茂、石橋湛山、大平正芳、そして細川護熙などではなかろうか。福田赳夫、小泉純一郎もそのようなタイプに含まれるかもしれない。

もとより私がこう考えるのは、これらの首相経験者が著した自伝や回想録を読んで知った人生観、それに首相としての政務の進め方などを確かめてのことである。吉田茂は、アメリカの大統領特使であるJ・F・ダレスとの講和条約案作りの交渉時に、ひそかに外務省にA B C Dの4案を作成させている。C案は「日本は、その憲法の規定し且つ既に実行してゐる非武装を維持」という驚愕（きょうがく）の案だった。事前にこのような案を準備する吉田なら、オバマ大統領の演説を聴きながら、よしそれではこちらをスピーチしようと、この状況に応じてオバマ大統領に対抗したはずだ。

この欄でも触れたが、石橋湛山は改めて戦争の愚を説き、宗教家、哲学者、そして政治家の姿勢で、核を持つ人類の将来に率直に不安を示したのではないか。大平正芳はクリスチャンとしてきわめてストイックな政治家であった。大平が外相、首相の時代には、「非核三原則」が揺らぐ状況で、そこで懊悩（おうのう）を続けた指導者でもあった。

大平だったらどうか。オバマ大統領のスピーチを聴いた後に、用意した原稿から離れて、では言わせてもらうが、といった感じで宗教家として、そして一個人としてスピーチを行っただろう。もっともオバマ大統領に呼応する形になったと思う。ここに「広島盟（ちか）い」が可能になったと歴史的に語られることになっただろう。

オバマスピーチには、「私たちは（これまでの）戦争自体に対する考え方を変えなければいけません」との訴えがある。こうした発言を受けて、もっとも人間的な発言ができるのは福田赳夫ではないか。首相在任中はタカ派と評され、官僚政治の典型のように見えたが、引退後に著した「回顧九十年」では本音はハト派であった。その地肌をオバマ大統領のスピーチに対抗して持ち出したなら、「広島盟い」をつくりえたように思うのだ。

今回のオバマ大統領のスピーチ原稿は、事前にメディアにリリースされていなかったという。大統領側近である副補佐官は、大統領が演説直前まで推敲（すいこう）を重ねていたと証言している。オバマ大統領にとって、追悼、慰霊よりも重要なことは歴史に「核時代放棄」を宣言することだった。謝罪の有無に関心を

持った日本の世論とはまったくかけ離れたところにいたのである。

そのことを予想した日本側指導者はいくつものスピーチ原稿をつくり、オバマ大統領の説いた内容に呼応すべきではなかっただろうか。